九条はらまち

福島県「はらまち九条の会」会報 **No.348**

2020（令和2）年9月29日（火）発行

■48年前の1972年9月29日は、田中角栄と周恩来が「日中共同声明」に署名し、国交正常化の日。

◀デザイン：朝倉悠三さん

○**「はらまち九条の会」**とは、戦争放棄の憲法第９条を守って「戦争をしない国・日本」を堅持しようと活動する、支持政党などを問わない市民の自由な会です○結成は2005年12月。会員は南相馬市原町区を中心に３８６名。年会費千円○3.11の大震災後、「事故の福島第一核発電所の最も近くで活動する九条の会」を自覚し、「日本国憲法の間接的起草者・憲法学者鈴木安蔵（小高区出身）の故郷の九条の会」を誇りに、活動しています。

会員の皆さんからの一言　安倍政権・菅政権について思うこと

安倍晋三首相は、私たち九条の会の主張と相反する集団的自衛権行使を閣議決定、特定秘密保護法・戦争法・共謀罪などを成立させ憲法を破壊し、虚偽と隠蔽で政治を私物化しますが、8月28日突然退陣を表明。9月16日には菅義偉新内閣が発足します。

そこで、両政権について会員さんの声を電話やメールで集めてみました。

☆　☆　☆

◆全国の「九条の会」の粘り強い活動が、安倍改憲を止めたと確信する。（男性）

◆安倍首相は、アベノミクス、東京五輪、改憲、拉致などの外交もコロナ対策も失敗、色々追求されるのも嫌だと、病気を口実に投げ出したのではないか。（女性）

◆病気退陣の安倍首相に70%、新しい菅内閣に74%の支持率だなんて、国民の意識が不可解です。菅政権が更に強権政治にならないことを祈りたい。（男性）

◆総裁選びが派閥や利権で行われ、「施し票」に呆れ「居抜き新内閣」に驚いた。（男性）

◆菅首相には、鈴木安蔵氏により生まれた憲法９条を守り、戦争のない平和な世界が長く続くよう世界の手本となる日本を作り、憲法改正というおかしな考えを持たないで欲しい。（男性）

◆菅内閣は安倍内閣の継承というが、安倍内閣の文書改ざん疑惑森友学園・加計学園・桜を見る会、河井克行・案理議員やジャパンライフ問題など疑惑の誠実な説明を求めたい。（女性）

◆前政権は愚昧。新政権は邪悪。それも極め付きの。新内閣支持率の異常な高さ。何か裏があるのではと勘繰りたくなる。政府に監視されるのではなく、我々国民が政府を監視しなくては。もはやレジスタンスが求められる時代だ。（男性）

◆菅首相誕生！ 産みの親は安倍政権だから、改革ではなく希望なき継続。（男性）

◆菅総裁就任会見で、「復興」は無視しビジョンは語らず、低次元の「自助・共助・公助」に呆れた。ウソで固めた東京五輪は開催できないのではないか。（男性）

◆平沢勝栄で復興相が９代目で任期1年で次々交替。被災地を軽視している。（男性）

◆菅さんの記者会見は人を見下したような冷酷な印象です。浜矩子さんは菅首相を奸佞首相とよぶ。奸佞とは「かんねい・心がねじけていて悪賢いこと」とか。（女性）

〈朝日川柳より〉
菅美談に騙（だま）されるほど馬鹿でなし／／菅さんの功罪検証せぬメディア
安倍麻生なんだか可愛く見えてきた／／自民飴（あめ）切っても切っても同じ顔

今年の“あきいち”は中止　恒例の本会の活動も断念です

No.348

「黒い雨」訴訟　国が被爆者を切り捨てて控訴

■「黒い雨」を浴びて健康障害があるのに被爆者健康手帳を交付しないのは違法だと原告84人の訴えが、この7月27日広島地裁でようやく認められました。しかし8月12日、非情で冷酷にも国は被爆者拡大を嫌って控訴したのです。

■これに対し「原発事故の被害者団体連絡会（ひだんれん）」など5団体は、9月29日厚生労働省と広島県、広島市に控訴取り下げを求める抗議声明を提出。ひだんれん幹事の村田弘さん（本会会員）は「広島原爆も福島の原発事故も、行政の線引きした地域にいたかどうかで判断されている」と指摘し、幅広い救済を求めています。

■南相馬市にも広島の原爆投下当日「黒い雨」にうたれた方がおられ、さらに相馬市には「被爆者の子」と娘さんの縁談が断られた方もいて、井伏鱒二の小説『黒い雨』そのままです。

＜南相馬市遠藤昌弘さんの被爆体験＞

呆然と"黒い雨"にうたれた

遠藤昌弘さんと奥様

私は大正14年福島市生まれで、南相馬市小高区育ちです。昭和20年1月、20歳で入隊し、病気で7月21日広島市の北西部の陸軍三滝分院（爆心地から北へ約2.5キロ地点）に入院しました。

その時、時間が止まったようでした

8月6日午前8時15分原爆投下のその時、私はベットで眠っていました。突然「空襲だ」という同室の兵士の叫び声で目を覚まし、逃げようと廊下の扉のレールを踏みつけました。その時のレールの冷たさが今でもこの足裏に残っているかのように、その瞬間を時間が止まったかのようによく覚えています。

パラパラと夕立のように「黒い雨」が

私は爆風で廊下に吹き飛ばされました。木造の病棟は真っすぐ上から押しつぶされ、屋根のスレート瓦が雨のように落ちてきて、怪我をしました。1時間ほど山の中をさまよっていた時、パラパラという音とともに雨が降ってきました。いわゆる「黒い雨」で夕立のようでした。私も周りの人たちも白衣は血で真っ赤で、その時初めて自分の怪我のひどさ、頭も両足、手の甲などの傷に気づき、隣の兵士は耳がなくなっていました。私たちは「黒い雨」にうたれ、ただ呆然としていました。

10月20日の武装解除まで、様々な凄惨な場面に出会いました。私自身も脱毛や、体中に化膿した吹出物やひどい下痢など、被爆の後遺症は50歳過ぎまで続き苦しみました。

昭和25年に小高に戻り、29年5月から小高町役場に勤務。「被爆者健康手帳」は被爆60年目の2005（平成17）年に、元福島大学学長星埜惇先生のご助言で交付を受けました。

原発は安全と信じていたが

東日本大震災は86歳の時、小高区の自宅で遭遇。20キロ圏内のため妻と長女と3人で、避難所の体育館や、福島市、神奈川県相模原市の知人宅に避難しました。避難中、「長い間原発は安全な平和産業で原爆とは違うと信じてきたが、裏切られたような気持ちに」「そして、まさか広島と小高で2度も放射能に脅かされるとは」と大変悔しい気持ちで一杯でした。

（被爆体験は1983年5月18日に聞取りしました）

＜相馬市ＳＳさんの被爆体験＞

「被爆者の子」と娘の縁談が断られる

相馬市日立木出身のＳＳさん（当時18歳）は広島の比治山の部隊の通信兵でした。8月6日広島の日赤病院に命令で向かっていた路上、爆心地から1.5キロ地点で3人の兵士と共に被爆します。ピカーと青白い光を感じますが、幸い建物の陰にいて軽傷で済みました。

終戦後、相馬市に帰り結婚。やがて年頃になった娘さんの縁談が、「被爆者の子」という理由で二度も解消され大変憤慨します。「私の名前を公表してもいいですよ。被爆者だなんて肩身の狭い思いをしている必要は全くないんですから」と話していました。

（1983年5月22日、相馬市のＳさん宅で聞取り）

○遠藤昌弘さん（会員）は、お話を伺った当初からお名前も顔写真も公表されていました。関連記事は、本会会報No.30、169、218、224にも掲載、ＨＰでご覧になれます。遠藤さんは2017年3月5日91歳で、奥様は2020年4月に逝去されました。今回、ご長女（会員）にお許しをいただき再掲載しました。

○相馬市のＳさんとは聞き取り後連絡が途絶え、そのまま掲載しました。（文責：山崎健一）